

【図書紹介】

クリスティ・クルツ著  
『学力工場の社会学』  
——英国の新自由主義的教育改革による不平等の再生産』

(仲田康一監訳・濱元伸彦訳、明石書店、2020年)

仲田 康一

(大東文化大学)

本書は、Christy Kulzによる単著の全訳である。著者は、ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジで社会学の博士を取得した新進気鋭の研究者であり、ケンブリッジ大学教育学部のリーヴァー・ヒューム・トラスト若手研究員等を経て、現在ではベルリン工科大学の研究員として、ブレグジットやなどヨーロッパにおける新たな境界線の引き直しの中での英国人移民在り方をベルリンをフィールドに研究している。

原著のもとになった博士論文は、2014年に英国教育学会優秀博士論文賞を受賞している。また原著は、教育学協会の初の出版賞を受賞するとともに、英国社会学会のフィリップ・アブラム出版賞の最終候補となった。

本書はエスグラフィの方法を用いて、イングランドの、ある大都市圏に所在する中等教育段階のアカデミーにおける実践を描写している。対象となるドリームフィールズ校は、困難地域で例外的とも言える学力達成を成し遂げた成功事例として、政治的にも政策的にも注目を集める学校であり、その舞台裏を描くものである。

だが、そこで描かれる「舞台裏」は、必ずしも、成功への「魔法のレシピ」を提供するというものではない。むしろ、輝かしい成功物語の表層の下にある複雑なストーリーを分析するという社会学的な問題関心が重要である。そこで分析視角は、副題が示すように、「新自由主義」的な教育政策のもとにおける、人種・階級の不平等の再生産というものである。

筆者は、この学校で18ヶ月に渡る参与観察と、46件のインタビューを行い、高い学力や進学実績の背景を探った。同校の改革は、校長のリーダーシップのもと、機動的で凝集的な学校組織を作ったことに特徴がある。民間企業的手法によって、格差の解消や、学校の改善が見込めるという通説の証明と目されているのが同校なのである。

調査の結果として筆者が明らかにしたのは、次のような事実であった。第1に、同校では、テスト結果を効率的に生み出すため、校長のリーダーシップのもとで学校改革が進められたが、その改革は、厳格な懲罰・規律・監視で教師と生徒を押さえ込む規律主義と、学力テストの結果を基準とした教師や生徒の分割と比較に基礎を置いていた。第2に、現代資本主義社会の「勝ち組」たる企業エリートへの憧れという「夢」や、競争社会での生存という恐怖を喚起することで、強圧的な指導は受忍されていた。第3に、企業エリートの文化を基盤とすることで、結果的に白

人中流階級の価値を暗黙的に内在させることになり、有色人種や労働者階級の子どもが排除される傾向にあった。第4に、日常化されたレイシズムは問題化されず、不均衡に非白人が懲戒の対象になっていた。以上の結果として第5に、学年が進むに従って地元の子どもは退学させられることになり、他方、地元地域内外から白人・中産階級をシックス・フォームに新たに入学させることが大学進学実績に影響している可能性も示唆された。

*Factories for Learning* という原著の題名は、学校が学力テストの成績という「生産物」を効率的に生み出す工場のような場所に成り下がっていることを批判するものである。原題を直訳すると、「学習の工場」となるが、やや生硬で、ニュアンスが伝わりにくいため、「学力向上」との掛詞を意識した造語「学力工場」を邦題に使用した。その「工場」の生産メカニズムは、校長のリーダーシップや企業的な学校改革によって不利な立場の子どもたちに未来を与えているというよりは、「夢」によって不利な立場にある生徒と教師を搾取しながら、結果的に弱者の排除と強者の一層の繁栄をもたらすものだった。テスト成績を効率的に上げることが主な役割となった時、学校はどのようなようになるのか。校長の強硬なリーダーシップや、強圧的な指導が、多様な背景を持つ子どもたちに何をもたらすのか。新自由主義的教育改革の蓄積的影響を受けながら、学校と社会はどのような関係を取り結んでいるのか。これらに答えを与える書物である。

本書の意義をいくつか指摘する。

一つは、アカデミー政策の効果検証という射程を超え、新自由主義の作用に対する深い理解を追求している点である。東京における講演で筆者は「新自由主義」について、「市場を前景化させるものであるとともに、市場的価値観を経済だけでなく、あらゆる機構や社会における行為に広げ、拡散する理性である」(Brown 2005: 39-40) というウェンディ・ブラウンの分析を引いている。この定義は、教育の市場化、競争、アカウントビリティや監査の強まりといったイングランドでの教育制度改革を直接に示唆するものであるが、同時に、単なる管理の技術的変革だけでなく、人々を新自由主義に適合的な主体に変革していく作用を持つ総体であることを指摘する点が重要だろう。それは言い換えれば「人々の日常的な実践と思考のあらゆる側面」に入り込み、「私たちが何者であるかということ、そして、私たちが行うこととの関係を変え」「私たちの行為の可能性の枠組みを変えようとする」統治理性なのである (Ball 2007: 186-7)。本書は、サッチャー以後の数十年で醸成された蓄積的影響をドリームフィールズ校で確認する研究であるとも言えるし、また、新自由主義による主体化が今まさに行われる場面を捉えた研究であるとも言える。

第二に、本書が、学校の内部に分け入り、社会的な格差がいかにして生み出されているかを描いた英国の学校エスノグラフィの伝統の上にあることも指摘したい。再生産問題を扱ったという点では、異なる階級間のソーシャル・ミックスという理念に反して、中産階級の子どもほど上位の能力別編成に配置されることを明らかにしたボールのケース・スタディ (Ball 1981)、反学校文化のしたたかさとその意図せざる帰結としての階級再生産を描いたウィリスのエスノグラフィ (Willis 1977) の功績が想起される。

しかし、それらは、主に白人中心の学校における階級問題を扱っていたのに対し、人種問題にもアプローチしていることが本書の意義である。人種と階級は、それぞれ相互に浸透し合うものとされ、まさにその相互規定性によって複雑化している。だが、白人・中産階級的な性向 (話し

方、振る舞い、服装、髪型等)は一貫して規範化されており、そこでの偏差が常に問われる状況にある。筆者が明らかにしているのは、特定の望ましが、将来、専門職的な仕事に就いた時に必要なハビトゥスであるという「合理性」を伴って規範化されていること、そして、それらは獲得的なものと捉えられていることである。だが、その獲得可能性は、誰にも開かれているわけではないし、それがマイノリティにとって望ましいこととも限らない。にもかかわらずその獲得可能性が強調されることにより、機会が開かれている装いをしつつ、特定の性向の規範化が合理化されることを明らかにしている。

本書は、綿密なエスノグラフィにより人々の日常の中に分け入る微視性と、その「厚い記述」の中に社会学的な洞察を描き出す理論性を両立させている。レス・バックは、社会学的な想像力に富む記述について、「理論的想像力と詳細な経験的データが相互に結びついている」という特徴を指摘する (Back 2007=2014 : 53)。曰く、「概念的、理論的な研究は当事者の声が聞こえなくなるような高みへと昇るべきではない。むしろ理論的な概念や思考は、民族誌的な地平ぎりぎりを漂いながら、それを詳しく説明する語彙を提供すべきなのである」(同前)。本書は、データと理論のいずれの水準においても優れた「選択眼と洞察力」そして「想像力と創造性」(同前)を提供するとともに、その具体的な記述によって新たな思考をも喚起する。本書の邦訳が、日英の違いを超えて、教育のあるべき姿に関する議論が広がるきっかけとなればと思う。

なお、Kulz博士が来日して行った講演について、本学会の後援を得た。本学会の支援を受けて進められた国際交流の延長に本翻訳がある。記して感謝したい。

---

#### 【参考文献】

- Back, L. (2007) *The Art of Listening*, Oxford : Berg. [=有元健訳『耳を傾ける技術』せりか書房、2014年]
- Ball, S. J. (1981) *Beachside Comprehensive : A Case-Study of Secondary Schooling*, Cambridge : Cambridge University Press.
- Ball, S. J. (2007) *Education Plc : Understanding Private Sector Participation in Public Sector Education*, London : Routledge.
- Brown, W. (2005) *Edgework : Critical Essays in Knowledge and Politics*, Princeton : Princeton University Press.
- Willis, P. (1977) *Learning to Labour*, Farnborough : Saxon House. [=熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども』ちくま書店、1996年]